

資
料

二〇二〇年度熊本大学法学部研究教育振興会主催 講演会

映画『プリズン・サークル』を通して考える

刑事施設と犯罪への対応

熊本大学法学部教授

岡 田 行 雄

映画監督・out of frame 代表・
一橋大学客員准教授

坂 上 香

岡田…それでは、ただいまより、熊本大学法学部研究教育振興会主催の講演会を開催したいと思います。

本日、講師としてご登壇いただく坂上香さんをご紹介します。

坂上さんは、ドキュメンタリーディレクターとして、死刑の問題、虐待被害から生じる暴力の連鎖の問題などを明らかにする

ことに取り組んでこられました。『癒しと和解の旅』という本も執筆されていらつしやいます。私が坂上さんの取組みに感銘を受けて、もう二〇年以上になるかと思っています。

いつか坂上さんに熊本にいらしていただき、熊本大学法学部の学生たちの前でお話をしていただきたいと思いますのです

が、お忙しい坂上さんに熊本にお越しいただくことがなかなかかなわない中、遠隔授業の方式でなら、東京からお話をいただけるのではないかと思います。遠隔授業の方式を用いた講演会が実現することとなりました。

このたび、坂上さんは、島根あさひ社会復帰促進センターという刑事施設に長期間カメラを入れて、その中で行われている受刑者の治療共同体（TC）の取組みにスポットを当てた映画『プリズン・サークル』を制作されました。今日は、この刑事施設での映画撮影というこれまでの日本ではなされてこなかった取組を中心、そこから見えてきたことなどをお話しいただけたらと思います。

それでは、坂上さん、よろしくお願い申し上げます。

自由剥奪という問題意識

坂上…どこまで伝わるかわからないのですが、今日はみなさんに劇場にお越しただいたつもりで背景をシアター仕様にしてみました。私は法学者ではないので、みなさんが学ばれている刑事政策という講義の中でどれだけ参考になるかわかりませんが、前回の刑事政策の遠隔授業にも参加して、レジュメもいただいたので、それを参考にしながら準備してみました。パワーポイントで用意しているので基本的にはそれに沿ってお話していきたいと思います。画面の共有をしたいと思います。みなさ

ん見えていますでしょうか？

今日は、「映画『プリズン・サークル』を通して考える刑事施設と犯罪への対応」ということでお話させていただきます。岡田先生は、前回の講義の冒頭で、刑事施設における拘禁は、社会で生活する自由を奪うものであっても、ありとあらゆる自由の剥奪ではないということに注意してくださいとおっしゃっていました。まさにその通りで、そのところを皆さんに考えていただきたいのです。受刑者の自由を極端に剥奪しているのが日本の刑務所だということ自体、私も認識はしていましたが、今回の撮影で目の当たりにしたことの一つです。取材については、法務省と刑務所からの制約が多いため、色々と限界があり、映画の中ではそこを大展開はできず、問題点を十分に映し出すことはできませんでした。ただ、過度な自由剥奪という問題意識を持ちながら撮ったことは間違いなく、映画のところどころにそうしたカットを含みました。映画が描く新しい更生プログラムを知ると同時に、自由刑というものが、ありとあらゆる自由の剥奪ではないということや、刑罰自体についても考えてもらえたらと思います。

ハイテク刑務所

舞台になったのは、あとで詳しくお話しますが、島根県浜田市にある島根あさひ社会復帰促進センターです。前回の講義

でも「社会復帰促進センター」という名前の新しい刑務所、PFI (Private Finance Initiative) と呼ばれる方法のものがあるという話があったと思います。PFIというのは、企画立案、資金の調達、施設の建設、維持管理、運営を一括して民間に委託するイギリス生まれの民間活用手法であると前回の講義資料にもあったと思いますが、まさにその一つを取材しました。映画の舞台になった島根あさひ社会復帰促進センターの特徴は、二〇〇〇人規模の男子刑務所ですが、この間も話があったように実は受刑者の数がすごく減っています。私が取材をしてカメラを入れたのが二〇一四年から二〇一六年までだったのですが、その頃はまだ一五〇〇人程度でした。それでも一番多かった頃ですが、去年の末で二二〇〇人程度と、定員の半分近くで、更に減っていると聞いています。

処遇指標とは何かについては前回聞いたと思いますので詳細は省きます。島根あさひでは、刑務所への収容が初めてで暴力団関係でない、心身の著しい障害がない、集団生活ができるというA指標の中でもさらに特別な、スーパーA級という風に言われている（スーパーA級という指標はないが、一部の人はそう呼ぶくらい）優等生が収容されていると言われています。しかし、優等生だとは私は思いませんでした。それでも、他と比較するとかかなり条件が揃った人があることは確かです。島根あさひには、さらにAの中でも若いYA指標の人たちと、障害があるPA指標の人たちのユニットもあります。YAはただ単

に若いというだけなので一般処遇に入っていますが、PAに關してはプログラムが分かれています。

社会復帰促進センターという名前がついている、四つの新しい刑務所はどこも大体最先端の設備を持っていますが、ここはその中でも最先端を行っているとします。CCTVカメラという監視カメラがあったり、X線の検査器があります。入口には、空港より厳重な薬物探知器があつて、最初行ったときびっくりしました。風がヒューと吹いてきてそこで薬物が体についていないかをチェックされます。もちろん金属探知機もありまして、荷物も全て開けますし、最初から厳重感が漂っている刑務所です。出所した人に島根あさひで印象的だったことを聞いたら、とにかくびっくりしたのがキオスク端末だったと。一般の刑務所では、石鹸を買う場合でも、願箋という紙に書いて提出するのですが、決まった日にちの決まった時間にしか出せないらしくて、それを逃してしまうとまた何週間も買うことができない。一方、島根あさひではキオスク端末を使つて、いつでも買いたいものが買えて、借りたい本をいつでも借りられるのでとてもびっくりしたと言っていました。映画の中にほんの数秒出てくるAGVという機械にも驚かれる観客が多いです。これは、ご飯を運んだりする自動運搬システムで、近未来的な刑務所です。また、施設にいる人全員が場所を把握されています。受刑者の人たちは胸に朝起きてから寝るまでICタグを装着していますし、撮影の際も私たちはまず首からかけるタグを渡さ

れますから、私たちの位置は全部警備室の中で管理されています。加えて、監視カメラは六五〇台もあるのです！

映画の編集をする時にもおもしろいことがあります。受刑者の顔は全部隠せと言われていたので編集段階でブラーをかけていくのですが、事前試写の前に法務省から言われた隠すべきもののリストの中に監視カメラがありました。試写前、私なりにチェックしてブラーをかけて画像をキャプチャして提出したら、「えー、こんなところにも隠しカメラあったのか」というくらいたくさん指摘されたんです。カメラで網羅される中で私たちは撮影していたんだと改めて気が付きました。また鍵穴も隠す対象になったのですが、その理由は、映像を見た人が鍵穴のタイプを選別して侵入するかもしれないからということでした。鍵穴、監視カメラに加えて、企業名や個人名などの文字も隠す対象でした。消すところは顔だけではなくてとてもたくさんあったのです。

刑務作業と改善指導

島根あさひでは、居住空間がだいたい六十名くらいまでの単位でユニットと呼ばれています。今までは舍房という呼ばれ方をしていました。懲役刑が多いので刑務作業を課せられている人がほとんどです。刑務作業というのは、電気機械器具とかの製造をしたり、金属部品の選り分けをしたり、他にもいろいろ

ありますが、そういうことをしています。刑務作業はユニット単位で、刑務所内の工場にみんな朝出掛けていきます。六十人くらいが全員同じ制服を着て列になって工場に行きます。

刑務作業以外に職業訓練というのがあって、資格を取れたりするわけです。理容師の養成だったり介護だったり。この特徴だと思うのですが、デジタルコンテンツ編集というのもあります。実は私が島根あさひに初めて行ったのは二〇〇九年で、その頃から撮影が始まる二〇一四年までの間、私は講師として一年に二回や三回呼ばれてワークショップを実施するために行っていました。何回か施設を見せてもらう機会もいただきましたが、びつくりしたのがデジタルコンテンツ編集の職業訓練でした。私も映像をやっているので興味深かったのですが、私は当時ファイナルカットプロというソフトを使っていました。これは結構難しく、私は独学でしたが、ちゃんと専門の学校で時間をかけて学ぼうとすると数十万から百万円単位のお金がかかります。私は仕方ないのでマニュアルを買ってDVDを見ながら学びましたが、なんとこの社会復帰促進センターでは近隣の専門学校の先生に来てもらって三か月みっちりやるということでした。三か月はすごいですよ。見に行ったら、CGも作れるモーショングラフィックというソフトを学んだりしていて、「これどうやってやったのですか！」「って聞いちゃうくらいのがすごいテクニックでした。「こういうのを発表したらいいじゃないですか」と言ったら、「ダメなのです、刑務所は成果

物を発表できないのです」と言うのです。ちよつと意味がよくわからなかったのですが、刑務所は罰の場所だから「習得して出来た成果物を発表ということはない」と言われて、腑に落ちませんでした。けれど、技術を得られるとても素晴らしい機会を彼らは持っているなと思いました。他にも、盲導犬を育てるパピープログラムがあつたり、馬を育てるホースプログラムがあつたり、人間関係を作る上で、動物との関係を作つて、そこから人間を成長させていく。そうすることでまた盲導犬という社会に必要な存在のものを育てていくという、お互いにウィンウィンな営みがあります。そこで作られるパンもすごく美味しくて、職員が信じられないくらい安い値段で買つて食べていました。そのように刑務作業以外の職業訓練も希望制です。

改善指導と呼ばれるものも導入されています。前回の話にもあつたように二〇〇六年に処遇法ができました。刑事被収容者処遇法になってから、改善指導、いわゆる更生の概念も含まれ、明記されるようになったので、すべての刑務所が実はこの改善指導を取り入れてはいます。ただ、しっかりと行われているのかというと、疑問です。前回、岡田先生も疑問を投げかけられていましたが、私も全部見たわけではないですが、もちろん頑張っている刑務所もあるし、それなりの効果を挙げているところもあるだろうけれども、あまり一般市民がわかる形では提示されていないし、私が実際に訪問して見せていただいたものは「ん？」という感じのものが多かったです。

改善指導の中には一般と特別という二種類があつて、前者は社会生活に適応するための生活態度に関する指導で、後者は薬物や飲酒からの離脱、性暴力などの問題に対応するもの、被害者に関するもの、就労支援などがあり、SST（ソーシャル・スキルズ・トレーニング）や認知行動療法、グループワークなどを取り入れて行っているようです。改善指導に関してこの社会復帰促進センターでは、支援員と呼ばれる民間の専門家が担つていて、特に心理系や社会福祉系の、ある資格を持った方たちが採用されています。島根あさひに限つて言うと、大林組というゼネコンの建築会社が入社してこの刑務所を建てるところからプログラムまで担っています。もちろん給食や医療関係などの他のサービスについては違う企業が請け負っています。改善指導と施設運営の面に関しては民間では大林組やその子会社が請け負っています。

他の社会復帰促進センターでも最近を受刑者のことを「訓練生」と呼び、お互いのことを「さん」付けて呼び合うようになっていると聞きます。これに対して私はいいなと思う反面、構造自体はほとんど変わっていないのに表向きだけクリーンに見せかけることに違和感を覚えます。刑務官は相変わらず受刑者を呼び捨てでなし、受刑者は自らを名乗るとき、番号と名前を、「大声で」言わなければならないのです。目の前にいる人に話しかけるととき、大声で言う必要はないですよ？だから訓練生と呼んでいるから人権を尊重していると言われると微妙な気持ちに

なるというのが正直なところです。訓練生と呼ぶことは悪くないので、呼びかたに見合った処遇をしてほしいなと思っています。

刑務所との交流を望んだ地域

ホームページの中に出てくる質問と回答の一部を紹介しています。「島根あさひ社会復帰促進センターの特徴を教えてください」という質問には、次のように答えられています。「国の知識、経験と民間のノウハウを活用した官民協働の運営がされています。」「地元旭町に誘致していただき整備された施設である」。今の社会では、刑務所や少年院、養護施設などは迷惑施設と思われるので、誘致計画が公開されると反対運動が起こることがあります。薬物依存症者の回復施設「タルク」に対してさえ、「来るな!」という感じで京都でも大騒ぎになっていて、排除の傾向が強まっています。一方で、地方の過疎化する地域で、工業や産業がない地域では実はウエルカムだったりもするんです。ここはウエルカムなところでした。立ち上げ時に関する資料を見せてもらったり、実際に立ち上げに関わった地元の人たちから直接話を聞いたりすると、とりわけ行政レベルでは、刑務所を誘致したいというのが強かったことがわかります。実は島根あさひ社会復帰促進センターがある土地は、もともと産業誘致のために工業団地を整備していたのですが、何年も放置状

態という状況が続いていて、それで刑務所を誘致しようということになったようでした。町長さんが頻繁に霞が関まで足を運び陳情したそうです。もちろん複数の自治体の手を挙げたので、厳正な審査をした結果ここに落ち着いたということですが、地元旭町が一生懸命誘致したというのは事実です。

それから、「官民・地域が力を合わせて受刑者の再犯を防止すること」とありますが、二〇〇九年から二〇一六年くらいまで通って感じたことは、官が圧倒的に強くてヒエラルキーのトップで、民間はあくまでも命令を下されてそれを受けるような立場であるということ。特に年が経つにつれ、その傾向が強まっているのではないかなと思います。最初の頃はもう少し官と民がすり合わせをしようというような気運が感じられたのですが、年が経つにつれて完全にヒエラルキー構造が定着してしまっただけ感じがします。だから、力を合わせてというのは嘘くさいなというのがあります。地域の人は、最初の頃は誘致しただけでなく、本当に歓迎していたんですよ。それがこの地域の特徴です。町自体が小さいというのもあるかもしれませんが、早い段階から住民と町が刑務所を誘致するにあたって意思疎通を行ったという点も他と違うところ。他の自治体と比べて旭町では住民がきちんと情報を得て、納得してこれを進めてきたということもあって反対が少なかったことや、開設後も住民の関心が高いという点がある比較調査から明らかにされています。ですから、街全体として出発点から刑務所とうまく共存してい

きたいと思っていた。ところが、実際のところ、刑務所と町は分断されているように思えます。そして、その弊害になつてきたのが官側だと私は感じています。

たとえば構外作業というのがあって、逃げないだろうと思われる優秀な訓練生を選んで、刑務所の構外でお茶の栽培作業をしています。その作業を指導する地元の人が、「本当は指導だけじゃなくてお茶を飲んだりお菓子を食べたりして、話したいんだよね」と。町の他の人たちも、「手伝ってくれるだけではなくてお茶を出したい」と。民間も「それ、とっても良いアイデアだね」と言っていたんです。実はイギリス、ノルウェーなど他の国では市民の人たちが受刑者と交流する場があります。お茶を飲んだり、週に何回か市民の人がボランティアで刑務所に来ておしゃべりをして過ごしたりということが長年続いています。だから、海外ではごく普通で、日本にはないだけです。しかし、こうした交流は「ありえないこと」として官によって切り捨てられてしまい、結局実現しないままです。

暴力をめぐるTV番組

回復共同体プログラムというのが今日のメインのお話になるのですが、映画の舞台になったところです。先ほど治療共同体という言葉も出しましたが、またあとで説明しますが、治療共同体と回復共同体、そしてTCというのは呼び方が違うだけで全

て同じものです。呼び名が複数あると混乱するので、これからTCと呼びますね。

ようやく『プリズン・サークル』への道のりに入ります。私に関心があるのは司法制度ではなくて、むしろ傷を負った後、トラウマという言葉に置き換えても良いのですが、トラウマを受けた後をどうやって生きていくのか。トラウマを負うということはイコールある種の希望を失ってしまうという状態でもあると思うのですが、その希望を失った後どうやってよりよく生きなおしていけるか。単に生き延びるだけではなくて、よりよく生きていけるのかということに私は関心があります。ですから、回復というコンセプトに関心があるのです。私は実は今までこうしたテーマの作品をたくさん作っています。

出身はテレビ業界で、スタートは一九九二年だったと思います。テレビ局に入ったわけではなくて、ドキュメンタリーを作ったかったので番組制作会社に入りました。ドキュメンタリー番組に特化した、ドキュメンタリージャパンという会社を見つけて、自分で売り込んで無理やり入れてもらいました。二〇〇一年まで私はテレビの仕事をしていたのですが、最初は南米が大好きで南米に関するドキュメンタリーを作ったかったけれど、なぜか気が付いたら暴力というテーマ、先ほど言った傷ついた後にどう生き延びたらよいかというテーマにハマってしまっていました。最初の頃の代表作としては一九九六年に作った『ジャーニー・オブ・ホープ』です。さつき岡田先生が

一九九九年に作った『癒しと和解の旅』という懐かしい本を出していただきましたが、この本のベースになった「ジャーニー・オブ・ホープ」という殺人事件の被害者遺族と死刑囚の家族が一緒に旅をして死刑廃止を訴えるという話でした。アメリカで一九九三年から行われている取り組みで、被害者遺族と加害者という反対の立場であるはずの人たちが一緒に活動をしているのです。一九九五～九六年に撮影して作品にしました。

それから、一九九六年に、アリス・ミラーについての番組も作りました。アリス・ミラーの著作では『魂の殺人』という新曜社から出版された本が一番有名ですが、簡単に言うと、虐待の連鎖の話です。この場合の虐待は、家庭内の場合だけではなくて社会における暴力を含むもので、例えば子どもという力のない存在に対して大人が教育やしつけという名のもとに抑圧することを目指します。そして、その虐待が世代を超えて続いていく暴力の連鎖についてのドキュメンタリーでした。この番組のなかで、今日話題にもなるTICと呼ばれるところを初めて紹介したほか、三年後に同じ場所を再び取材して別の番組を作りました。

それから修復的司法についても番組を作りました。これについて説明するのはとても難しいのですが、簡単にいうと、次のようになります。近代の司法では犯罪とは国に対する違法行為と捉え、国がその加害者をどう裁くかという話になりますが、修復的司法というものは違います。そもそも起こったその犯罪

を損害と捉えます。犯罪が起こると、被害者、加害者はもちろんのこと、その影響を受ける人がこの両者以外にも存在すると考えます。被害者の家族だったり、時には加害者の家族だったりするかもしれないし、友達、学校、被害・加害の当事者をめぐるコミュニティに関わる人たちも、修復的司法の範疇に入ります。端的に言うと、加害者、被害者、そしてコミュニティという三つで損害をどう修復していくのかという考え方を描いた番組を作ったのです。

そのすべてがほぼワンパッケージで入っているものが「希望の法廷」と呼ばれる番組です。薬物の問題を抱えている少年たちを、司法や福祉やコミュニティがいかに連携して支えていくかというドキュメンタリーをアメリカで作りました。少年犯罪が対象なのですが、少年が罪を犯した時にコミュニティでどのように問題に対応するのかという修復的司法も入っているし、回復共同体も入っているし、ドラッグコートと呼ばれる薬物専門裁判所も入っている。その後、テレビの業界を離れます。簡単に言うと、慰安婦の番組を作ったところで、今の政権のトップに介入されて番組が改竄されてしまったのですが、関心ある方は調べてみてください。俗に「NHKEITV改変問題」と言われる事件で関連書籍もかなり出ています。

撮れない日本の刑事施設

テレビ業界を脱退してしばらく路頭に迷っていたのですが、やっぱり私は映像が作りたいと思い、TVCをめぐるドキュメンタリーを映画にして劇場公開をしました。それが『ライフアーズ 終身刑を超えて』という映画デビュー作で、舞台はカリフォルニアの刑務所と社会復帰施設です。この映画のために、五つの刑務所で撮影を行いました。

それから十年後の二〇一四年に完成させた劇場公開映画『トークバック 沈黙を破る女たち』が舞台にしたのは、アメリカの女性刑務所で行われていた演劇で、受刑者の女性たちと演劇のプロが一緒に始めたものです。撮影の途中から被写体だった劇団の方針が変わってきて、HIV患者の女性たち、医療機関と元受刑者の女性たちと演劇のプロがコラボして演劇を作っていくという話になりましたが、私自身一時期サンフランシスコの女子刑務所に入って撮影を行っていました。

その次に作ったのが『プリズン・サークル』なのですが、お気づきの通り、それまでの撮影の舞台は外国だったんですね。何で日本の矯正施設を撮らなかったのか？みんな「撮れ撮れ」って簡単に言うのですが、簡単ではないのです。もちろん撮りたかったし、撮ろうとしたし、テレビ業界にいた時代は法務省まで行って「少年院を取材させていただきたいのですが」と

言ったりしたのですが、門前払いで全く相手にされませんでした。撮影は無理でしたが、私は日本で、色々な形で刑務所、少年院を含む矯正施設に潜り込んできました。一番最初に日本で刑務所に行ったのが一九九〇年代初の頃で、ある大学の法学部のゼミに潜り込ませてもらいました。先生も良いつて言ったんですよ。何で潜り込んだのかというと、あの頃は特に刑務所参観に簡単には行けなかった。名古屋刑務所での暴行死事件が二〇〇二年に起こって以降は法務省も一般人にも刑務所参観を認める方向に変わりました。今では、比較的容易に刑務所参観に行けますが、昔はゼミで参観と言っても、「何学部ですか？何のためですか？」とかものすごく細かくチェックされたのです。今でも聞かれますが、断然昔よりは行きやすくなっています。一番最初に行ったのが、多摩少年院と府中刑務所です。

私は実は死刑囚ともずっと二〇一八年まで面会をしていました。その人は死刑を執行されてしまったのですが、執行される前までは、一九九四年から面会していました。死刑確定後三年くらいは会えなかったので途中のブランクはありましたが、それ以外の期間は東京拘置所に通っていました。他に千葉刑務所や横浜刑務所とかも大学のゼミに潜り込んで行きました。途中くらいからは流れが変わってきました。なぜかという私が海外的の刑務所の番組などを作るようになっていたので、刑務所側から講演依頼があったり、話を聞きたいと言われたり。そして『ライフアーズ』の映画ができたことで、映画の上映とトーク

で行ったりもしました。ただ、そうであつてもジャーナリストだというだけで二〇〇〇年あたりは訪問を断られたりもしました。海外から来た人の通訳として入るうとしたら、「坂上さんはダメです」と言われ、理由を聞くと、「ジャーナリストだから」と言われました。刑事施設というのは、そのようにすごく閉鎖的な場所で、訪問しても公開される部分には限りがあります。最近では、知り合いになつた刑務所の所長さんや少年院の院長さんの一言で「あ、いいわよ」と。日本の矯正施設というのは施設長のひと声ですべてが変わるというのが本当にあります。訪問できるからいいと言えはいいのですが、今まで複雑な手続きをして、苦勞して入っているのに、『フェアじゃないよな。そんな在り方自体がおかしい』と思います。

「島根あさひ」の衝撃

国内の施設を三〇年見てきて思ったことは、再犯を防ぐ場所ではなく、単なる処罰の場所ではないかということでした。少年院は少し違うところがありますが、でもやっぱり処罰の面が生活の面でも未だに強いんです。ですから、二〇〇九年に初めてこの島根あさひ社会復帰促進センターに足を踏み入れて衝撃を受けたんです。見かけもすごく綺麗で、光もたくさん入っていて明るい。今までの刑務所のイメージとは違う感じでした。今回の『プリズン・サークル』という映画の舞台は、その刑務所

のTCユニットと呼ばれる場所で、行ってみて色々なことを思ったのですが、絶対にこれは記録に残すべきだと思いました。そこで「これ映画にしましょう」と言ったのですが、誰も聞いてくれないんですね。「前例がないから無理。」そう言われ続けて六年間。

だからといって六年間何もしていなかったわけではありません。民間の支援員さんの中で理解を示してくれて、この映画ができた意味があると思ってくれた人が一人いました。たった一人。みなさん。何でもたった一人でも良いのです。その人にすごく協力してもらつて、その人が講師としての私を繋いでくれたのです。その間に所長と仲良くなったり、最終的には、とある理解のある所長さんに繋がってゴリ押しをお願いをしたのですが、六年間色々な形でアピールし続けました。講師として入ると、受刑者とは普通にしゃべれるんですよ。映画の中でも受刑者同士がおしゃべりをしているシーンがあるのですが、そんな感じで講師も一緒に話すことができました。

この『プリズン・サークル』という映画は刑務所を回復の観点から描いた映画だと私は思っています。今年の一月二五日に公開された途端、新型コロナウイルスが流行つてしまつて、一か月ちよつと上映したかと思つたらミニシアターが閉鎖されてしまいました。ずっと泣いていたのですが、「仮設の映画館」というネット上での上映をつい最近、三週間くらい前の五月一六日に始めました。今はネットでも見られるし、劇場もちょっ

とずつ再開していて観られるようになりました。でも、劇場は人と人との間に二人分くらい空間を空けないといけないというのもあるし、外に出る、人がいるところに行くというのはまだまだ怖いと思うので、なかなか人が戻ってこなくて、ちょうどその時期に映画の公開というのは本当に呪われているように思っています。

国内の刑務所と「暴力の連鎖」

この映画も、やはり傷の後をどう生き延びていくのかというのがテーマです。時間が結構過ぎているので、ささっといきませんが、暴力のサイクルという被害から加害というのをどう断ち切っていくのかについていうことを考えて仕事をしています。この映画もそうですね。暴力のサイクルというのは聞くだけでみんな「え？ちがうでしょ」と言う人もいて、嫌悪感を持つ人もいますので、そのあたりを簡単に説明します。

まず、アリス・ミラーという人物に先ほど少し触れましたが、彼女は元精神分析医で精神分析医療界から脱退しました。「教育」や「しつけ」に潜む暴力性というのを訴えた途端に猛批判を受けたようです。その後、思想家として暴力のサイクルというものを明るみにしていきました。最終的にはそれを断ち切るにはどうしたら良いのかというのを読者に考えさせる本を書いています。事例としてヒトラーとか、死刑囚なんかを扱ってい

ます。パウロ・クレイなどのアーティストの事例もありますが、具体的な人の人生を通して、特に子ども時代がどうだったのかというのを見て、最終的に彼らの暴力性がどう身につけられてきたかということ明らかにしています。アメリカ版のTVCの代表と言っても良いと思うのですが、アミティというところがあって、私が作った『ライファーズ』という映画の舞台となつたところなんですけども、そこが彼女のカリキュラムを取り入れています。幼少期に虐待を受け続けて傷が癒されないとどうなるか、という問い。それはアンヒールド・トラウマ (Unhealed Trauma) という心理学用語でもあるのですが、アリス・ミラーによると、傷が癒されなままだと、それが他者への暴力となつて現れる。いわゆるフィジカルな暴力もあれば精神的、言動的な暴力も含まれます。もう一つの現れ方が自分への暴力です。これは自傷行為、リストカットとか自死、薬物などの危険物質を使用したり依存したりすること、あとは精神疾患などの病気といった形で現れるということもあります。

いずれにせよ、傷、トラウマが原点にあると考えられます。それが癒されないと暴力になり、それが繰り返されていく。暴力のサイクルについて詳しく知りたい人は、私が書いた、岩波書店から出版されている刑事司法シリーズの被害者編に掲載されている論文をお読みください。ざっくりと言うと、アリス・ミラーは、人によって他者への暴力、自分への暴力と表れ方が別々だと書いていて、私もそうだと思う反面、両方の反応が出

ている人も多くいると感じました。私が調べたもう一つのS T A R (Strategies for Trauma Awareness & Resilience) プログラムでは、トラウマ的な経験をすると、最初の方は自傷的な傾向が強いのですが、途中から他者への暴力、例えば、虐待や、無意識のうちに、虐待や言語的・精神的な暴力を行ってしまう人もいます。あるいは他者を殺したいと思ったり、加害者に死刑を求めてしまう人、仇討的な行動に至る人もいます。これはとても言いづらいのですが、加害者を死刑にしてほしいと働きかける被害者遺族をどう捉えるのか？癒されないことで負のループに陥り、被害者遺族が加害者のサイクルに止まってしまいう危険性も考えられるわけです。被害者遺族が深い傷を負って、癒されないままだと、この加害者サイクル・被害者サイクルを両方とも体験してしまうのではないかと？だからといって、被害者らしい「正しい」立ち居振る舞いを押し付けられることも傷を深める要因となるのではないかと？そういう意味では、被害者のサイクルの中にある、トラウマの存在をきちんと把握し、暴力サイクルを何らかの形で断ち切る必要がある。アミティが良く使う、サンクチュアリという概念、自分が安全だと感じられる場所、言い換えると、ここなら何を言っても責められないなど自分が安全だと思える場所が実は被害者にこそ、必要なのではないかと思えます。

また、自分への暴力、他者への暴力には様々な段階があります。「被害者だからこれ、加害者だからこれ」といった固定化

されたケアではなく、段階に応じた細かなケアが必要です。同時に、加害者になってしまった人は、回復するだけでなく、他者にも傷つけてしまっているのが、アカウンタビリティが必要だというのが、修復的司法の考えです。

T C という場

今回の映画のベースになったT Cは、回復共同体や治療共同体などと呼ばれていて、説明が難しいのですが、簡単に説明すると、セラピューティック・コミュニティ (Therapeutic Community) という言葉の略語で、日本の訳語としては治療共同体として知られています。日本では精神病院でT Cの活動が始まり、治療共同体と呼ばれてきたからです。イギリスでは一九三十年代から始まっていますが、アメリカでは実はアルコールや薬物治療者が中心になってきているので、傾向が前者とはやや異なっています。私も最初は治療共同体と呼んでいたのですが、最近では回復共同体と呼ぶようにしています。

特徴としては、T Cには様々な回復のカタチがあるので一概には言えないのですが、一方が癒し、一方が癒されるだけという関係ではなくて、当事者同士の問題を抱えている人同士の相互補完的な関係、お互いが癒し、癒され合う関係ですね。アメリカでは薬物依存者が中心ですが、最初は戦争の帰還兵、特に第二次世界大戦やベトナム戦争などから帰ってきた元兵士たち

や依存症の人たちが、従来の治療方法では全然良くなかったことから、こういうスタイルが使われました。アメリカでは、刑務所で始まっているのではなく、刑務所の外から始まっているのです。六十年代から七十年代に、刑務所内でこのT Cが始まっているのですが、ちよつとやっではなくなるなど、最初は定着しませんでした。アメリカで定着したのは九十年代から。一度は予算の関係で無くなったのですが、二〇〇〇年代からまたT Cが導入されました。しかし、二〇〇五年から二〇〇六年頃はカリフォルニア州では激減して、アミティも最初は十何か所でT Cをやっていたのが一気になるほどという大変な時期を経て、この三月には二十数か所にアミティによるT Cが導入されました。

私はアリス・ミラーの紹介でこのN P Oが運営するこのT Cを知りました。当事者中心で、スタッフも当事者なのです。元薬物中毒者で、刑務所に入っていた経験のある人たちがスタッフになっていきます。人間的成長という言葉がキーワードです。先程もお話ししましたように刑務所では普通処罰というものが中心ですが、T Cでは人間的に回復していくことが中心で、犯罪をしなくなるということがゴールではなく、人間的に成長していくことの方が大切なのです。

アミティでは、感情に力を入れていて、エモーションナル・リテラシー (Emotional Literacy) という言葉があるのですが、感情を理解し、受け止め、適切に表現する力を育むことに力を費

やしています。先ほど触れた「サンクチュアリ」という場にアミティがなることを実証しているのです。スライドにある上の写真の二つは刑務所ですね。左はすごく大きいですが、ユニットでの朝の会の様子を撮ったものなのですが、ちよつと別の場所に小さいグループワークができるような場所があり、そこに通ってT Cをやっているのです。下の写真はアリゾナ州にある社会復帰施設で、ネイティブアメリカンの文化をアミティではすごく大切にしています。毎週日曜日には、たき火を囲んでみんなで語り合う会を開いたりしていました。この右側はロサンジェルスでの施設で、元ギャングの人が多いのですが、刑務所から帰って来たばかりの人たちが一定期間暮らすという社会復帰施設です。

刑務所におけるT Cを見ていきます。普通の刑務所では、刑務官がいて受刑者を監視・管理しています。一方的に命令形の言葉で受刑者に指示しますよね。でもT Cにおいてはお互いの関係が円形の形をしているのです。『プリズン・サークル』という名前からもわかるように、関係性が互いに円のようにつながりあっているのです。スタッフもこの円の中に入っています。島根の場合は、民間の支援員が輪に入って、みんなと一緒に語り合います。もちろん置かれていた状況や立場は受刑者と同じではないですが、対等な目線で話していると感じました。アミティの場合は、スタッフが元受刑者であることが多いので、受刑者の歩んできた道が分かるのです。アミティでは再犯率がと

ても低いです。米国の普通の刑務所では七十五パーセントほどの再犯率があるのです。つまり、刑務所を出所したらほぼ戻ってくるようになります。それに対して、刑務所の中にあるアミティを利用した受刑者の場合、様々なプログラムを受けていることもあって、二十パーセントほどの再犯率です。この数字は刑務所内のアミティに参加しただけのものとして、出所後にも、社会復帰施設でプログラムを継続した場合は十七パーセントほどの再犯率と、さらに低くなります。

『ライフアーツ』から島根あさひへ

島根あさひにおけるTCの話に移りますが、私が作った『ライフアーツ』という映画を観た大林組の人が、『これだ』と思ったそうです。もちろん、他のイギリスなど他国の刑務所プログラムも見ただで、アミティのカリキュラムを日本に導入したいと思ったのがスタートのきっかけです。彼らはアミティに滞在し、複数回研修を受けたそうです。その後アミティの人を日本に呼び研修を行います。入念な準備をしたことがとても大切なことだったと思います。実は島根あさひのTCユニットはアミティのプログラムだけではなく、認知行動療法も使っています。大阪大学の藤岡淳子教授がこのカリキュラムを担当しています。映画の中でもロールブレイが出てくるのですが、修復的司法のやり方を使って、被害者の役と加害者の役を演じ合いま

す。

TCにおいては、アミティのカリキュラムを日本語に訳したものがあり、それをテキストとして使っています。水曜日から金曜日まで、それぞれ半日を使ってカリキュラムを行います。先程紹介したように彼らも刑務作業はするのですね。だから一週間のうち、火曜日は丸々刑務作業をします。月、水、木、金も半分の時間は作業にあてています。月曜日は教育の日と呼んでいて、全部のユニットが半日は何らかの特別な教育的プログラムを受けることになっています。

この島根あさひ社会復帰促進センターでは、四人の民間支援員が、四十人くらいの受刑者の面倒を見ることになっています。二つのグループ、AとBグループに分かれて、その時によって違う内容を行います。例えば、Aグループがアミティのカリキュラムを行うときは、Bグループは認知行動療法を行うという感じです。そういえば、これが一番びっくりしたのですけど、『ライフアーツ』という私が作った映画を、この刑務所では、受刑者が必ず最初に観ることなのです。一〇年以上ですから一万人以上の受刑者が観たことになります。

TCは希望制です。TCユニットの存在を知らせ、希望する受刑者が手を挙げ、志望動機書を書きます。加えて、いくつかの条件があります。半年以上刑期が残っていること、IQが七十以上であること、深刻な精神疾患が見つかってないことなどです。逆に、薬物依存やアルコール依存の受刑者は優先的に

入れてもらえます。実際には面接を行った上で決まります。参加する人の罪種は色々です。依存症の人たちを優先にしていると聞いたのですが、そんなに多いという印象を私は持ちませんでした。少なくとも撮影中は窃盗や性犯罪の受刑者が結構いましたね。犯罪傾向が進んでいない初犯向けの刑務所ですが、結果的に被害者が亡くなっているという傷害致死などの受刑者はそれなりにいました。ここでは最高刑にあたる八年の刑期の人もしました。

TCでは三か月ごとにグループを再編していくのです。二つのテキストを三か月毎に、繰り返し使っています。アミティのテキストは考えさせたり、反芻させたりすることを大切にしています。例えば、何に葛藤しているのかについて話したとしても、過去に話したときとこれから話すときとは、その時期によつて見えてくるものが全然違うのです。だから、一回この話はしたからと言って解決することではなくて、むしろ何度も語り合うことが大切とされています。二年撮影していて皆が成長している姿を見て本当にその通りだと私も感じました。学校のように様々な係活動もあります。とりわけカリキュラム係と呼ばれる係が大事だと感じました。カリキュラムの運営を受刑者自らが行うのです。映画を見た多くの人が驚きます。与えられたテーマをどのように料理して、どのように皆に提示するのかを任されていて、余暇時間といわれる休み時間でも土日を使って準備をします。私たちはその準備をしているところを撮影さ

せてはもらえず残念でしたが、出所した人たちは、そのプロセスから多くを学んだと言います。

TCのプログラムは二〇〇九年二月に始まって、二〇一九年、去年の末までに三六七名が参加しています。再入所率がとても低いことから、その効果がわかると思います。島根あさひ社会復帰センターのTC以外の一般受刑者たちの刑事施設への再入率は一九・六パーセントです。これ自体、国内全体の再入所率と比べると低いのです。国内の刑事施設を出た人の再入率は四八パーセントですから。島根あさひは初犯用の刑務所なのでそもそも再入所率が低いのですね。TC受講者を見てみると、なんと九二・二パーセントと、さらにその半分以上です。TCは参加者数が極端に少ないこともあり、数値だけでは判断できませんが、それでも効果が現れていると言えるのではないのでしょうか。

島根あさひの撮影から見えてきたこと

撮影している中でわかってきたことというのが、国内の刑務所の中でも受刑者の多くが深刻な暴力を受けてきた被害者だということ。欧米では、多くの研究結果からも明らかだったのですが、もともと日本はアメリカのそうした状況に対して対岸の火事的な姿勢が強かったのです。日本では矯正施設内の調査自体がとても少ないこともあり、問題自体が把握されてきて

いない。ところが実際はアメリカのそれと引けをとらない程に多くの問題を抱えていると感じました。

そもそも受刑者自身、被害の認識がないことが多い。T.Cに入ってから間もない頃は特にそうで、「全然被害なんか受けたことはないよ」と言っていた人が、プログラムを受講する中で、「あつ、ぼくが受けていたのは被害だったんだ」と、認識が変わっていくのですね。教育を受けるなかで、自分がこれまでに気づかなかったことに気づいていたり、どこかでその被害を恥に感じて抑圧してきたりという人がたくさんいるのだということも、改めて感じました。時間とプロセスが必要、ということも痛感したことの一つです。

性犯罪者については、私の撮影対象者の中にもいたのですが、映画の主人公からは外しました。撮影に制約が多かったことが一番の理由です。一か月に三日間くらいから二、三週間くらい撮影を続けていきましたが、とても限定的だし、撮影自体が刑務官によって極度にコントロールされました。私からすれば、「あなたが映画監督か？」とツツコミたくなるくらい介入されていたのですが、刑務官と喧嘩をしようとして撮影できなくなってしまうので我慢しました。そのような厳しい環境で撮影していたので、性犯罪については十分に取材できなかったという思いが私の中にはあるんです。もちろん、他の犯罪についても十分だというわけではありませんが、性犯罪は扱いが難しい。性に関わる問題なのでデリケートですし、被害者が映画を

見て傷つけられる危険性もあります。性犯罪についてはしばしば聞くことができたのですが、彼らのそれまでの人生や彼らが受けた被害については、丹念に聴けませんでした。

ただそうした限界も含めて、映画では表現できなかったこの性暴力について、岩波書店の「世界」という雑誌の連載「プリズン・サークル 囚われから自由になるプラクティス」の七月号に向けて書いたところです。一月号から、一年間にわたって連載をしていて、六月号では、いじめについて書いています。受刑者たちの多くがいじめの被害を過去に受けています。また、加害をした人、被害・加害の両方を経験している人も少なくないです。いじめといえば、被害者が自殺して初めてマスメディアは大騒ぎをします。しかし、大半は生き延び、その被害の影響自体はずっと長く続くんです。私自身も、中学校の頃、いじめやリンチを受けました。そうした被害体験が未だに私の中のどこかに残っているという感じがあります。雑誌の連載では、映画には出せなかったことを中心に書いています。特に七月号では、あまり語られることのない、男性受刑者の過去の性暴力の被害を書いているので、ぜひ読んで下さい。

これまでの話をまとめると、日本の場合、矯正施設という場所が自由を極端に縛ることに力を注いできたあまり、再犯防止に役立っていないのではないかと疑問です。T.Cの場合は更生に特化しているので例外ですが、すべての受刑者がT.Cに合うかというところというわけではないでしょう。しかし、一つ

の選択肢としてTCは効果があるのではないかと思います。先程、修復的司法の話をしました。それはこの島根あさひ社会復帰促進センターでも取り入れられてきています。ただ、実際の被害者との関係を受刑者が修復する機会があるのかというと、それはないです。私も、島根あさひに講師として関わっていた頃、被害者遺族の人を同伴して一緒にワークをしたりしたことがあったのですが、自分が傷つけた直接の被害者ではなくとも、被害当事者から受刑者が話を聞くことはとても意義が大きいと思いました。また、実際の被害者全員が加害者と直接対話する場を持てる訳でも、持つべきだとも思わないのですけれども、被害者がそれを求めるのであれば、対話の場をもっと積極的に持つても良いのではないかと思います。海外ではそのような機会がたくさんあるのだけれど、日本では修復的司法という考え自体が知られていないし、接点を持てる機会がない。だから、なかなか修復が進まないとも言える。刑務所内でいくらやっても外の世界に修復の場が何もないのではモチベーションも続かないですよ。つい最近も出所してきた元受刑者の人と話をしていた、やはりそこが課題だということになりました。被害者の方に謝りたい、償いたいと思っている受刑者はいるのに、それを実現させるためのしくみ（橋渡し）が欠けている。残念です。

私は『トークバック』という映画で、演劇と刑務所、演劇と問題を抱えた人、というテーマに取り組んだのですが、最近特

にアメリカのカリフォルニア州では、矯正教育＝アートとなってきたいます。ミュージシャン、アーティスト、演劇関係者、プロの表現者らを刑務所に連れてきて、刑務所の中でワークシヨップをして、そのワークシヨップの成果として出来上がった作品を社会に公開するのです。受刑者がどのようなことを考えて生きているのか、価値観も含めていいことも悪いことも社会に知らせる。センセーショナルなテレビ番組だけではない、多様な表現媒体を、社会につながる可能性があるということをお教えしてくれます。残念ながらこういう取り組みは日本の刑事施設にはほとんどないです。確かに、刑事施設の中にも俳句クラブとありますが、それは余暇時間をどう過ごすかだけのものであって、社会と刑事施設をつなぐ表現媒体にはなっていない。日本の刑事施設の中には徹底した秘密主義があり、名古屋刑務所事件が起こったことをきっかけに、「刑事施設を社会に対してちょっと開きましょう」ということになったのですが、本質はちつとも変わっていないと感じます。もちろん、プライバシーを守るために秘密にしなければならない部分はあるのですが、刑事施設で取材をしていて「なぜ教えてくれないんですか」「それを言うってくれないと、撮影の準備ができないでしょう」ということだらけで、本当に困りました。社会の理解を促すためにも、情報公開の必要性を感じます。

加えて、受刑者は外と繋がるのが大切だと思うのです。数年で外に出ていく人たちだから、外その他機関と一切連携させ

ないということがどれだけ弊害となることか。映画を見るとわかると思うのですが、刑事施設には、二つの世界があるのですよね。極端に厳しくて心を折るような世界と、それと全く反対の世界。私もその二つの世界の間で心が割れそうになりました。より後者に近づけ、矛盾を変えていかなければならないと個人的には思っています。そして、実は刑務官も極度に管理されていて、生活にも縛りがあつて、社会にいるのに全然自由ではないというのも、私は変えるべきだと思います。ただ困ったなと思うのは、彼ら自身が飼い馴らされてしまつていて、全然自由を感じていなかったりすること。例えば、矯正施設に批判的だった知人が少年院で働くようになってから「少年院は全然不自由なところではないよ」と、それまでと全く違う発言をするようになり、人間は環境によって変わるのだと改めて思いました。

また、今日は刑事政策の授業なので矯正施設に特化してお話ししましたが、実は塀の外の世界にも全て当てはまるのですよね。映画では、むしろそちらのほうに想像力を広げて見て頂きたいという思いがあります。

おわりに

私は今、映画『プリズン・サークル』を見てもらう巡回の旅をやるうとして、二カ月くらいあちこちの上映館を訪ねて回り

ました。現在は、新型コロナウイルスの影響で閉鎖されていますが、それまでは精力的に足を運び、刑務所と社会をつなぐためのアートと同じように、映画を見た人と私たちと対話をする場所を設けることに尽力しました。実はオンラインでも可能性を追求していて、その一環で、六月七日にCPR（監獄人権情報センター）の企画で、この映画をもとにオンライントークをします。良かったら参加してみてください。

最後に皆さんに質問しますが、法を超えて、あるいは法も含めてでもいいんですが、犯罪に対して社会はどのようにあるべきだと思いますか？その中でも刑務所という場所はどのようにあるべきだと思いますか？こうした点を皆さんに考えていただきたいです。私もずっと考えていきます。以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

岡田…ありがとうございます。今チャットでたくさん質問が来ています。このチャットの質問の中から私の方で絞って、坂上さんに質問をさせていただきたいと思います。まず、多くの方が関心を持っているのは、なぜ暴力を振るわれるというトラウマがあると、他の人を害するような方に行ってしまうのかという点です。逆に言うと、アリス・ミラーの考え方で、トラウマが一度でも癒されるとするなら、その後、暴力に向かうことは無くなっていくのでしょうか？

坂上…難しい問題ですね。トラウマを受けるとなぜ暴力に向かうのか。人間は、特に深い傷を負うと、そして癒されていないと、ある時期は隠せても、いずれ出てきてしまうのですよね。放射性物資がメルトダウンすれば、原子炉内に閉じ込めていても、放射線が漏れ出てしまうようなもの。症状としては、アリス・ミラーに限らず様々な人が言っていますが、自傷行為であったり、人に暴力を振るうことであつたり、暴言を吐いたりするといった暴力になる。トラウマが短期で癒されるのか、癒されれば暴力を振るわずに済むのかについては難しいところですが、例えば、上岡陽江さんという「ダルク女性ハウス」の代表が、回復という言葉の定義をこのようにしているですね。「回復とは、回復し続けること」。つまり一度で良くなったり、回復したと言いつけること自体、難しいのではないか。私たちも癖が治らなかつたり、ダイエットしてもリバウンドしたりすることありますよね。傷というのが何らかの形でケアされても残ってしまう。それとどのように付き合っていけば良いのか。

私自身も、最近になって、四〇年前に受けた傷が突然疼いて動揺することがありました。もうとくに乗り越えたと思つていたことでしたから、動揺した自分にもショックでした。友人たちに話をたくさん聞いてもらいました。映画の中にも同じ様な発言をする人がいましたが、ケアは必要だけれど、ケアを受けたからといって解決するということではないと思いました。

またガードナーという学者による男性の性暴力の被害に関す

る本や、ギリガンという精神科医の調査でも明らかになっているのですが、子どもの時に性被害に遭った人の中で、しっかりと話を聞いてくれる人、話を受け止めてくれる人が、とりわけ事件直後に周りに一人でもいた人は、刑務所に入らない確率が高い。もちろん、確実にそうなるとは限らないですが、被害を受けた直後にどれだけのサポートがあつたかはとても大きなことで、今回の『プリズン・サークル』の主人公にとっては、そういう人が誰もいなかった。しかもその後もずっと過去の傷を話せずにいた人ばかりなので、やはり周りのサポートが大切であると感じています。

岡田…ありがとうございます。今、仰つていただいた、虐待被害に遭った時に支えてくれる人が一人でもいてくれたことは大きなことだと、アリス・ミラーさん自身がNHKのテレビ番組の中で仰つていて、私はそれをずっと記憶しているのです。あれは本当に真実だと思います。色々な人たちから話を聞く度に、やはり支えてくれる人がいたか、いなかったかでは非常に大きな違いになって表れているのだなと。そういう意味で虐待を受けている子どもたちの支えをいかに増やしていくかというのが、本当の意味での暴力の連鎖を断ち切ることなのではないかと思ひ私自身が研究しているのです。

坂上…その通りですね。繰り返しますが、深刻な傷というのは

簡単には消えないのだと認識した上で、被害直後から様々な段階における、様々なタイプのニーズに応えられる多様なサポートを持つことが大切だと感じています。刑事司法からは外れてしまいましたが、犯罪の加害・被害共に、司法が根本的解決にはならないと言うことを、司法を学ばれている皆さんだからこそ、意識しておいた方が良いのではないかと思います。

岡田…そのために多くの連携を取ることも。これも私の研究テーマでもあり、取り組んでいるところでもあります。坂上さんからは今日は貴重なお話をおうかがいできて、誠にありがとうございます。皆さん拍手をお願いします。それでは、これで終わりたいと思います。

付記

本稿は、岡田が担当している刑事政策の講義の時間を使って、熊本大学法学部研究教育振興会主催で、二〇二〇年六月二日に、坂上香さんを遠隔授業の形でお招きしてご講演していただいた内容をまとめたものである。

本稿における坂上さんのご講演は、坂上さんが『プリズン・サークル』という映画の撮影を通してスポットライトを当てた、島根あさひ社会復帰促進センターにおける回復共同体の取組みの意義を鮮やかに示す。他方で、それは、回復共同体の取組みの意義を覆い隠さんばかりに広がる、従来の日本の刑事施設が

常に持ち続けてきた特殊性をも鮮やかに示しているように思われる。その特殊性とは、行刑の密行性や刑事施設の閉鎖性であり、理論的には受刑者から移転の自由を奪うだけのはずの自由刑が、他の様々な自由までも奪っているという現実でもある。

そして、こうした特殊性が、刑事施設を社会からかけ離れた場所とすることによって、受刑者に単なる害悪を与えるだけで、むしろ受刑者の立ち直りを困難にしていることは、たびたび指摘されてきた。³⁾

今回の坂上さんのご講演は、こうした問題に加えて、受刑者の多くが、過去に様々な傷つけられた体験を抱え、その傷つけられたという、つらく、重い体験を誰とも共有してもらえないまま罪を犯し、島根あさひ社会復帰促進センターという、ある種、特殊な刑事施設の中で、その体験を初めて共有してもらえたという現実を示している。しかも、この回復共同体プログラムを受講できた受刑者の再入率が顕著に低いという事実も示されている。少なくとも、受刑者の傷つけられた体験を共有してもらええる場を得たことと、その受刑者の社会復帰後の再入率の低さとの相関性が示唆されているとは言えそうである。

そうすると、受刑者の傷つけられた体験にどのように向き合うべきか、そして、受刑段階だけでなく、刑事手続全体において、その対象者が無用に傷つけられることをどのように減らしていくべきかが、刑事政策学における課題の一つとなりうることが示されているとも言えよう。

なお、このご講演とその後の質疑応答の反訳については、熊本大学法学部三年生の尾山穂乃佳さんと二宮圭亮さんにご尽力いただいた。記して謝意を表したい。

最後に、当日ご講演いただいた坂上香さんに、改めて、心より御礼申し上げる次第である。

註

(1) 二〇〇二年五月と九月に、皮手錠付きで保護房に収容された受刑者が、刑務官の集団暴行によつて死亡したり、腹部内出血の大怪我をさせられたりしたことが二〇〇二年一〇月に公表された後、二〇〇一年一二月にも、刑務官が受刑者の肛門部に消火用ホースで高圧放水して直腸裂傷を負わせ、細菌性ショックで死亡していたことが明るみにでた名古屋刑務所での一連の事件を指す。本事件とそれに関連する動きなどの詳細については、本庄武「名古屋刑務所暴行事件」法学セミナー五八二号（二〇〇三年）三四頁以下参照。

(2) 名古屋刑務所事件においても、行刑の密行性や日本の刑事施設の閉鎖性が色濃く出ている点については、本庄・前掲注一論文三六頁参照。

(3) 本庄武は、いわゆる日本型行刑が支配する刑事施設においては、「受刑者は、自由と外部交通を広範に制限されたいわば滅菌状態で、従属的な生活に慣らされることになる。

このような状態の受刑者が、出所後に、誘惑の多い環境に置かれた時、犯罪者であるとのラベリングを克服して、自立して生活していくのは至難の技である。この点で、日本において真に受刑者の社会復帰に向けた処遇が行われていたとは言い難い」と指摘している。本庄武「日本における受刑者処遇理念の変遷と今後の展望」龍谷大学矯正・保護研究センター研究年報六号（二〇〇九年）三五頁参照。